

2006/11/24

伊賀市

「水需要管理に向けて（061123版）」（淀川流域委員会）の意見

①工業用水の需要について（P23）

伊賀市は、人口増は少ないものの、将来工場等の誘致によって工業系の需要が大幅に伸びる計画を立てている。新規需要（14,270m³/日）は、工業系水需要であり市の財政状況から見ても懸念材料である。

新規需要（14,270m³/日）のうち、工業用水の新規需要は7,100m³/日であるので修正してください。何故なら、伊賀地域には、工業用水道がなく、工場用水については立地工場が自前で整備するか、市の水道からの給水により対応することになります。当地域は、大都市圏である名古屋と大阪を結ぶ線上にあり、また、名阪国道は通行料が要らないこともあって、地域的に企業立地に恵まれた環境にあります。今回の好景気により企業立地も進んでいます。（同じ線上にある亀山市は、立地企業への工場用水の確保に非常に苦労しています。）

当市は、もともと水源が乏しいことから、工場用水を多く使用する業種の企業立地は進んでいなく、多使用型の工場の立地があれば、日量6000m³の工業用水では足りないことも考えられます。

工業用水道が整備されていないなどで、一人一日当たりの水量が多くなっているのは、員弁町（698ℓ）、関町（671ℓ）、伊賀町（684ℓ）、鳥羽市（1096ℓ）、尾鷲市（1038ℓ）、海山町（1344ℓ）、紀伊長島町（722ℓ）等があります。

多度町は、工業用水道が整備されているが1011リットルと多くの水量を使用しています。伊賀地域も工業用水道の計画がないことから、立地が進めば当然多くの水量が必要となります。（平成16年度実績から）

②自己水源の廃止について（P23）

自己水源の廃止（14,294m³/日）は、伊賀用水が整備されれば要らなくなるとの見方からほとんど放置され、更新整備がなされなかったことによる取水量の低下である。

現在33箇所の自己水源については、取水量の低下、水質の悪化、小規模水源の点在及び施設の老朽化により水需要が逼迫している状況で、現水源の維持管理のため365日昼夜関係なく管理しており、稼働率の平均値が90%以上のフル回転で取水をして、市民に供給しているのが現状です。

このため、伊賀水道用水供給事業に水源を求め、安心・安全な水を市民に供給するのが市の責務であります。

よって、「伊賀用水が整備されれば要らなくなるとの見方からほとんど放置され、

更新整備なされなかったこと」とは本末転倒であり、修正してください。

上記の理由として、旧市町村ごとに現実の詳細について説明します。

1. 上野上水道については12箇所の自己水源で現在稼動しており、その中で伊賀用水を受けることによる廃止水源としては以下のとおりです。

(1) 守田水源 (7,257m³/日、水利権)

守田浄水場の取水権は、川上ダムの建設を前提として与えられた暫定豊水水利権で不安定極まりのないものであり、浄水場は川上ダム建設計画と整合のもとに建設された施設 (S51 建築) で、伊賀水道用水供給事業に水利権を吸収される施設であり、いずれ稼動できなくなります。また、当初平成17年度受水予定が平成21年度に遅れているため、さらに老朽化が進み、機械の補修・交換部品は形式が古いため製造されておらず、故障が危惧されている状況です。

(2) 西部第1水源 (672m³/日、H14 値)

第7次拡張事業により簡易水道から上水道へ統合した水源です。

治水事業で遊水地のなかにある水源となっているため、廃止すべき水源ですが、水量が足りないため現在まで稼動しているのが現状です。

(3) 猪田第1水源 (651m³/日、H14 値)

第7次拡張事業により簡易水道から上水道へ統合した水源です。

当時から小規模で施設が老朽化していたため廃止予定でしたが、水量が足りないため現在まで稼動しているのが現状です。

(4) 寺田水源 (167m³/日、H14 値)

第7次拡張事業により簡易水道から上水道へ統合した水源ですが、上水道の水量が足りないため小規模なりにも稼動させていました。

しかし、H16年7月の水質検査の結果、クリプトスポリジウム指標菌である大腸菌の陽性反応が検出され、施設更新か廃止かを検討した結果、施設改良に多額の費用を要するので廃止している現状です。

2. 伊賀上水道については5箇所の自己水源で現在稼動しており、その中で伊賀用水を受けることによる廃止水源としては以下のとおりです。

(1) 朝古川水源 (876m³/日、H14 値)

この水源については、溪流に取水堰堤を築き取水していますが、施設の老朽化及び維持費のコスト高の理由により、県受水後は災害時に対応すべく廃止ではなく予備水源として管理していく計画です。

(2) 岡鼻水源 (717m³/日、H14 値)

この水源については、柘植川上流の表流水により取水していますが、施設の老朽化及び維持費のコスト高により県受水後は災害時に対応すべく廃止ではなく、予備水源として管理していく計画です。

3. 阿山上水道については6箇所の自己水源の内3ヶ所は水源枯渇等により現在停止状態であり、そのため昨夏も水量不足により節水を呼びかけているのが現状で、慢性的に水量不足を生じています。その中で伊賀用水を受けることによる廃止水源としては以下のとおりです。

(1) 槇山第2水源1号井 (252m³/日、H14 値)

平成3年当時より取水している深井戸水源ですが、水源の枯渇により年々取水量が低下してきたため、H15年からは停止状態です。

(2) 玉滝水源 (499m³/日、H14 値)

平成3年から稼働の阿山上水道以降は予備水源としての位置づけで、平成15年までできていましたが、取水量の低下及び施設の老朽化により廃止しているのが現状です。

(3) 河合第1号 (394m³/日、H14 値)

平成3年から稼働の阿山上水道以降は予備水源としての位置づけで、平成15年までできていましたが、取水量の低下及び施設の老朽化により廃止しているのが現状です。

4. 島ヶ原地区の簡易水道については4箇所の自己水源で現在稼働しており、その中で、伊賀用水を受けることによる廃止水源としては以下のとおりです。

(1) 中矢第4水源 (247m³/日、H14 値)

この水源においては、平成6年の大渇水時の翌年に急ぎよ建設した水源であるが、水質においては鉄・マンガン・フッ素・ホウ素が含まれており、特にフッ素及びホウ素除去には非常に高額の維持費を要しているため、県受水後は廃止予定です。

5. 大山田地区の山田簡易水道については2箇所の自己水源で現在稼働しており、その中で、伊賀用水を受けることによる廃止水源はありません。

しかし、浅井戸である泥淵水源 (1,424m³/日、H14 値) については、枯渇化が進み渇水時期には農業用水からの融通もしていただいておりますが、管理団体との協議に苦慮しているのが現状です。

6. 青山地区の阿保・上津簡易水道については4箇所の自己水源で現在稼働しており、その中で、伊賀用水を受けることによる廃止水源はありません。

しかし、桐ヶ丘住宅団地に給水している浅井戸が水源の枯渇化が進み、その水量分を補うために県受水を受ける計画です。

以上から、「自己水源の廃止……市の対応は疑問である。」の表現については、再考をお願いします。

なお、一方 国においては「21世紀初頭のわが国は、20世紀に整備され

た水道施設の多くが老朽化しつつあり、その更新が課題となっている。21世紀は、今後幾度となく繰り返される水道施設の大規模更新・再構築を初めて経験する世紀となる。」と重要な課題として謳っています。

当市においても決して例外ではなく、上記に述べたとおり特に水源施設について、枯渇化による取水量の低下、施設の更新時期をむかえております。

このことから、水源転換を図るという意味からも伊賀水道用水供給事業が機能交換的な要因を保持していると考えられます。